

連携協力校の校内研修において教職大学院生の提案
授業をどのようにして作成したか：
小学校6年社会科歴史単元授業を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 公開日: 2013-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三上, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7306

⑥静岡大学教職大学院提案授業

連携協力校の校内研修において教職大学院生の提案授業をどのようにして作成したか

—小学校 6 年社会科歴史単元授業を通して—

静岡大学教職大学院院生 三上聡

1 はじめに

今年度はじめ、静岡大学に在籍する現職大学院生として、連携する A 小学校の研修に年間かわる事が決まった。どのようにかわることが、最もお互いの利益につながるのか、特に A 小学校の利益とは、まさに、A 小の子どもたちの利益といっても過言ではないと思っていた。しかし、研修会の時だけ参加する大学院生に、それがどれほど難しいことかは、学校現場に身を置いたことがある方なら想像がつくであろう。そこで、今回の提案は、交流学校の子どもたちのことを十分知ることができない教職大学院の院生が、どのようにしたら、より相手校の願いに寄り添う研修の参加のしかたができるのかについて試行錯誤した結果を報告する。

2 実践の概要と検証の手立て

静岡大学教職大学院は、今年度、年間 7 回、A 小学校の全体研修に参加してきた。目的を文章で表現するなら、それぞれ違う立場をもった院生と A 小学校の職員が同じ研修で相互啓発する事により、お互いの教師の実践的力量を高め、子どもたちに還元していこうということになる。

本稿では、その中で、11 月に実施された大学院生の 6 年生社会科提案授業について取り上げる。

3 授業について

3-1 授業の柱

院生の 4 人で、3 日間、延べ 120 分の事前検討を行い、次のような授業の柱を考え単元デザインを作成した。

① A 小学校の先生方が興味をもつ手立てを具体的に授業の中に取り入れること

A 小学校は、研修の柱の一つとして、今年度から本格実施された新学習指導要領の中軸でもある「言語活動の充実」を挙げている。また、先生方の多くが、院生が紹介した、逆向き設計論から生まれた評価方法「パフォーマンス評価」について、興味関心が高いことをつかんでいた。そこで言語活動を取り入れたパフォーマンス評価を授業に取り入れることを一つの柱と考えた。

② 見栄えを考えた授業をせず、子どもたち全員が学びに参加する授業を作ること

いただいた時間は 3 時間。この時期の 6 年生から 3 時間いただくのが、非常に厳しいことは、誰しもが分かる事である。しかし、3 時間で社会科の単元を一つ学ぶことは難しい。とにかく、見栄えの良い授業より、子どもたちすべてが学びに参加することを柱とした。

以上 2 つの柱から、私自身が、調査員としてかかわった発掘調査で出土した本物の資料から、実際に調査報告書を作成する活動を取り入れた社会科歴史単元の授業を作ることにした。

3-2 授業の構想

1校時は、教科書の記述が様々な発見で変わったことを紹介し「教科書がすべて正しいとは限らないんだ。」という思いが子どもの中に芽生えることを期待した。また、歴史の教科書は、その時代を中心になる場所や人物を取り上げることが多いが、今自分たちの住んでいるこの場所にも、様々な思いで生きていた人が存在したことに気付くために、実際の出土遺物や写真を紹介した。さらに「専門的なことは分からない。」という学びからの逃走を防ぐため、発掘調査員が実際に行っている分析方法を、「ミニ発掘調査員になろう。」を合言葉に、実物や実際の図を使って楽しく伝えることに努めた。発掘現場などで、「この溝は、家の跡で、ここが竈の部分だよ。」などと家族に説明ができることを目指し、実物、パワーポイント資料、画用紙に描いた簡略図、地図資料など、調査員の技を伝授する資料を用意した。

2・3校時には、まだ専門家も詳細な結論を出していない、A小学校の学区に隣接するB小学校の体育館改修工事から出土した集落の遺跡を教材に用いた。「自分たちの考えが本当に歴史の事実を明らかにするかもしれない。」という期待から、学ぶ必然性を生みだそうと考えたためである。解決する必然性のある課題に対して、その鍵となる資料を手にとって観察するための時間も確保した。3校時の最後には、言語活動につながるパフォーマンス評価を具現化した。子どもたちが、記述式で書いた発掘調査報告書を、ループリックをもとに評価するという事後研修にもつなげた。

表1 実際の単元の履歴

時間	目的	内容
1校時	○歴史教科書は、様々な調査から書き変えられることに気付く。	・狩猟と採集が主だったと学んだ縄文時代の三内丸山遺跡では、栽培活動を行っていたことを紹介。
1校時	○A小学校の立地するF市にもたくさんの遺跡があることに気づき、歴史を身近に感じることができる。 (自分たちの住んでいる所にも、いろんなことを考えて生きていた人がいたんだね。)	・自分たちの住む地域にもたくさんの遺跡や古墳があることを紹介する。また、教科書に載っているような、勾玉、銅鏡、土器等が出土していることを主に実物を使って紹介する。
1校時	○発掘調査員の検証の方法を知り、自分にもできるという期待を抱く。(家族に伝えたい。)	・柱穴の跡から建物を想像する方法や、石室に残された宝物の場所から遺体の安置状況を想像する方法など、実際の発掘調査員の分析方法を紹介。 ・実物を用い、石錘の使い方を、みんなで考えることで、発掘調査員がどのように出土した遺跡や遺物から当時の様子を分析するのかを紹介する。
2校時	○自分たちの考えが、歴史を作るかもしれないことに気づき意欲を高める。	・15地区から出土した実物資料などを、発掘調査員と同じように観察する。
3校時	○発掘調査員になって自分の考えをまとめる。	・簡易版発掘調査報告書（パフォーマンス課題）を作成する。

3-3 第3校時の流れ

A小学校の職員全員が参観した3校時の授業について具体的に紹介する。

授業は、Ⅰ：本時の見通しを持つ。Ⅱ：自分の考えをノートに書いて整理する。Ⅲ：自由交流をして相互に啓発をする。Ⅳ：全体で話し合っ、考えをさらに深める。Ⅴ：発掘調査報告書（A5自由記述）を作成する。の5つの節目をもって行われた。

4 授業の結果

授業の結果について①事後研の付箋による感想②子どもの感想③プロトコルの3点を紹介する。

4-1 事後研の談話から

授業後30分間の本授業に関するリフレクションをA小学校職員と行った。短い時間であったが、様々な意見が出たこと（表2）から考えると、授業の柱であった①A小学校の先生方が望む手立てを具体的に見せることについては、概ね達成したと考えることができるのではないかな。

表2 事後研における付箋に書かれた感想からの分析

カテゴリー		事例	
		成果	課題
教師の手 だて	資料の選定 と提示	・本物の力は大きい・様々な情報に番号をふってあったので、子どもたちが発言するときに、何を根拠としているのかわかりやすかった。	・「多面的に考える」ために多くの資料が与えられていたが、そのひとつひとつの意味や相互のかかわり考えるのは、なかなか難しい感じがしました。・資料をもう少し減らしてもよかったのではないか。情報を処理しきれない子もいたと思うし、
	学習課題の 設定	・今まで習ってきた歴史がどうやって検証され形づくられてきたのかを知るよき機会となり興味を深められたと思う。・まだ結論が出ていないことで、ごっこではない本物の体験となった。	・時期的にきつかったか。子どもたちが古代について学んでいるときなら、もっと熱くなったのではないか。タイムリー性。・本時の目標で、「どんな人がどんな目的で暮らしていたのか」「目的」は難しいと思う。
	子どもへの 対応	・切り返しの発問（例：地区の人が中心になったってどういうこと？）、引き出す発問（例：何と交換？どこから？）、広げる発問（例：この資料に関してはまだ出てないよ）が有効であったと思う。	・子どもたちの発言を板書していなかったで、個々の意見のつながりが見えにくかった。・全体の場で発表したり、発掘調査報告書を書いたりする時間をもう少し確保したかった。
子どもの あらわれ	学習課題へ の取組	・どの子も報告書にぎっしりと書かれており、意欲的に取り組めてよかった。 ・まだ専門家も結論を出していない事例を考えるということだったので、子どもたちは意欲的だった。これからもこの東平遺跡について興味をもち続ける子どもになるかもしれない。	・資料からわかることを考えているはずが、自分の想像の話になりすぎてしまうことはどうなのだろうか。・資料が手元にない状態で、子どもたちは、どこまで自分の考えをつくらせていたのか。

自由交流による 関わり合い	・自由交流により、自分が考え付かなかった盲点を友達からアドバイスされ、「ああ、そうか」という声がよくあがっていた。学びが深まっていくのがわかった。	・自由交流で男女で話す姿があまり見られなかった。同じ子とずっと話していた。・子どもの発言がやはりつながっていないことがうきぼりになった。自分の言葉だけで終わっていた。
------------------	---	---

A小学校の職員が付箋に書いて模造紙に添付し各学年で検討した授業の感想（表2）から、成果について検討していく。

「様々な情報に番号をふってあったので、子どもたちが発言するときに、何を根拠としているのかわかりやすかった。」など、教師の手立てに関する良い面について感想や、「子どもたちの発言を板書していなかったのも、個々の意見のつながりが見えにくかった。」など課題についての感想は、A小学校の職員が自分自身の実践的知識を再構築している姿だと捉えることができる。また、良い面だけでなく、課題も数多く出され共有されたことは、外部の大学院だからこそできた研修の活性化と言えるのではないだろうか。つまり、A小学校と関連の薄い大学院生の授業は、純粋に授業の構想、手立てに関しての良い点や課題を出し合って話し合う場を提供できるというメリットがあると考えられる。今後、大学院が学校の研修に参入していく一つの活路であると考えられる。

4-2 子どもの感想から

2つめの目標「子どもたち全員が学びに参加する授業」であったのかを、子どもたちの感想を基に分析する。子どもたちの感想は、学級担任のF教諭が、わざわざ自分の授業時間を割いて、子どもたちに書かせて下さった。A4の紙に、35人全員が、びっしりと文字を埋めていた。感想に書かれていたこの授業が楽しかった理由を表3に分類した。理由はそれぞれ違っていたが、100%の子どもたちが、本授業を楽しかったという肯定的な感想を持ったことが確認できた。T男さんの「いろいろ

表3 子どもたちの感想

授業が楽しかった理由	人数
本物があったこと。	16
先生の説明の仕方や表現。	13
ミニ発掘調査員になれたこと。	12
推理みたいな学びかた。	6
証拠をもとに考えたこと。	4
普通の授業ではやらないことがやれた。	4
実際の調査員と同じやり方で考えたこと。	4
自分の意見を伝えることができたこと。	3
みんなで話し合ったこと。	1
歴史に興味をもてたこと。	1
遺跡の秘密がわかったこと。	1
発掘調査員のすごさが分かったこと。	1

んな証拠を使って昔のことを考えるのは楽しかった。」やM美さんの「特に楽しかった所は、証拠をもとに考え出すことでした。」から、発掘調査員と同じやり方を教授したことが、暗記するのではなく考える社会科の楽しさを伝えることにつながったと考えることができるのではないだろうか。

4-3 授業プロトコル（逐語記録からの分析）

授業後、V T Rから、本授業の逐語記録を学部卒院生が作成した。その記録から、子どもたちが、どのような学びをしていたのか紹介する。

本来、集落においてそれぞれの住居の竈は、同じ方向に向いていることが一般的である。しかし、この15地区では、ばらばらなことについての子どもたちが以下のように話し合った。

L：私は、Yさんの方の意見だと思います。理由は、さすがにお金持ちでも、そんな、なんかまわりに、いろんなお客さんとかが、を自分の家に招いたりしたりして、それでまわりの人から、まわりの家から煙とかが出たら、もうお客さんとかが来なくなっちゃうかもしれないし、そういうことは、自分勝手にはしないと思います。Kさん。

K：えっと、さっきのIさんの意見に質問で、もしIさんが、自分が自分勝手に何でもやって良いとして、で③番の竈の向きがバラバラっていうのは、もしIさんだったら、なんで竈の向きをバラバラにするんですか？

I：はい。お金持ちの人がまず自分だけバラバラにして、それから他の住人の人も、なんかお金持ちの人が自分勝手にやっているの自分たちの自分勝手にやろ、やったと思います。Yさん。

Y：Iさんに質問で、1人偉い人がいたら、普通はみんなそれに合わせると思います。

竈の位置がばらばらなのは、お金持ちで権力のある人の自分勝手であると主張するIさんにLさん、Kさん、Yさんがそれぞれ自分の物語を作って反論している。ここで、なぜお金持ちという考え方が生まれたのか。それは、当時貴重なものであった鉄製品や、馬具が出土しているということから、権力者がこの15地区にいたのではないかという、証拠から生み出された考えなのである。このことから、子どもたちが、知り得た情報と自分の今までの知識を総動員して、歴史の謎を解き明かそうと、深く考えていたことが確認できた。

5 まとめ

大学院生が、連携する小学校の研修に、どのような形で参加すれば、互恵的な学びができるのか、静岡大学教職大学院の院生がA小学校で、授業を行ったことに焦点を当てて考えてきた。その手立てとして、①A小学校の職員が求める、言語活動を取り入れたパフォーマンス評価を取り入れること。②子どもが真に学ぶ授業をすること。の2点を柱に授業を構想し、授業後の研修や、子どもたちの感想、授業記録などからその検証を行った。院生が連携小学校で授業を行うことに関しては、概ね目標を達成できるのではないかと考える。しかし、「いつ授業を行うのか。その時期をいつ決めるのか。時数をどれくらいもらうのが、学校、子どもの両方にとってよいのか。」など、連携協力校の実情に十分配慮した参加のしかたが求められることを肝に銘じて、来年度の連携を行う必要性があることも感じた。